

ヨロンブルーの海と珊瑚を守るためアイデア光る美化活動を発信

協会会長賞 鹿児島県 与論町立茶花小学校

鹿児島県の最南端に位置する珊瑚礁に囲まれた与論島。ヨロンブルーともいわれる日本屈指の透明度を誇る海には、色とりどりの熱帯魚が生息する。しかし、近年、海岸の漂着ごみが深刻化。砂浜の清掃を行う住民が、回収した海ごみを入れる専用の木箱を海岸沿いに設置し、「拾い箱」と名付けた。その活動を児童に紹介したところ、拾い箱をカラフルにペイントし、イラストを描こうと、児童から次々アイデアが生まれ、住民との協働制作につながった。さらに、拾い箱に海ごみを入れて協力してくれた人に、感謝の気持ちを伝えるため、児童が拾い箱のフタにちょっとしたサプライズを仕掛けると、その工夫に感動した観光客から手紙が届くなど大きな反響があった。

手ごたえをつかんだ児童は、「もっと与論島を好きになって欲しい」との思いが高まり、積極的に町や海岸の清掃を行うようになった。そして、これらの活動を発信しようと、イラストや写真を盛り込んだパンフレットを作成し、空港や港などに設置。同時に、島の一大イベント「ヨロンマラソン」のウェルカムパーティーで、日頃の取り組みを発表しながら大々的にPRしている。

こうした一連の取り組みは、同校独自の「海洋教育科『ゆんぬ学』（島の言葉で与論学）」で実施、総合的な学習の時間を中心に、教科横断的に学びを広げている。海を守るのは自分たちだという責任感が芽生えた児童は、漁協の協力によりサンゴの移植活動を始めた。

与論町漁協の参事、箕作（きさく）広光さんは、「自分たちの植えたサンゴが大きく育っているのを実際目にする、子どもたちの目がきらきら輝きます。サンゴの減少という課題解決につながると期待しています」と目を細める。

与論島には「島だちの教育」という言葉がある。島だちの「だち」には3つの意味が込められ、ひとつは島を離れる（発つ）までに、基礎学力や生活習慣を身に着けること。2つ目は、将来与論島に戻ってきた子どもたちが島を興す（建てる）。最後は、他の島に行ってもその地で自立すること。ゆんぬ学を通じて力強く生きるための礎を築いた子どもたちは、島だちを迎える準備が着々と整っている。



鹿児島県 与論町立茶花（ちゃばな）小学校

学校長：段原 修司（だんばら しゅうじ）

児童数：146名（2022年11月末現在）

住所：鹿児島県大島郡与論町茶花 298

電話：0997-97-2031

アクセス：与論空港から車で約10分

上：ヨロンブルーの海を守り続ける児童、2左：拾い箱をカラフルにペイントして観光客にPR、2右：拾い箱のフタに海ごみを回収してくれた人に感謝を伝える仕掛け、3左：サンゴの移植活動、3右：観光客に島の環境や美化活動をアピールするパンフレット、下：ヨロンマラソンのウェルカムパーティーで環境保全を訴える